4月　15日

こんにちは。いかがお過ごしでしょうか？

信じられないかもしれませんが、私は今、コーンウォール地方の、あるお城に住んでいます。どうしてだと思いますか？実は先日、あるイギリス人の貴族と婚約したのです。つまり、このお城が私の家になるというわけです。なんてすばらしいことなのでしょう。もう夢のようです。豪華な応接間のソファーでくつろぎ、紅茶を飲みながら優雅な話題に花を咲かせ微笑む自分の姿をときどき想像してしまいます。どうです？素敵だと思いませんか？

私が卒業した後どうして故郷のケント州に戻らなかったのか、不思議に思われているでしょうね。でも、このまままっすぐに故郷に戻る事など考えられませんでした。私は、2～3ヶ月休暇を取った後、なにかやりがいのある仕事に就こうと決心しました。そんな折、一枚の求人広告を見つけました。コーンウォール地方のお城で、ジャック・トレシリアンという貴族の秘書をする仕事でした。そして、私は今、そのジャック卿のお城にいるのです。

ジャック卿は、私が想像していた人物とはまったく違って、若く堅実な男性でした。加えて、なかなかハンサム。はじめてあった時からすっかり彼の虜になってしまったのです。嬉しいことに彼も私に好意を抱いてくれたのです。もしも、彼が私に関心を抱いてくれなかったら、私は崖から飛び降りて自殺していたかもしれません。

私たちは5月3日に、同じコーンウォール地方に住む貴族の人たちを招いてパーティを開き、そこで私たちの婚約を発表しました。あなたがここにいてくれたならば、きっと、どのフォークを使ったらよいのか教えてくれたでしょうね。信じられないかもしれませんが、上流階級の人たちの中には、ものすごく気位の高い人がいて、晩餐会で場違いな服装で来ようものなら、もう二度と口を聞いてはくれないのですよ。だけど、彼は他の貴族とは違って、たとえそんな失敗をしても、笑って済ましてしまうような、そんなユーモアのある人なのです。本当によかったとつくづく思いました。そんな彼だから、私は貴族社会の格式にとらわれずに、ありのままでいられるのです。

集った貴族の中の一人に、ボヘミア人がいます。ビビアン・ペントリースといって画家であり、彫刻家でもあります。彼女は、私たちの近所に住んでいて、50歳だというのに25歳のときと同じような美しさをそなえている女性なのです。彼女は、トレシリアン卿の先代、ライオネル卿の奥様でした。ビビアンの家族は、何代も前から、ここ、コーンウォール地方に住んでいるので、面白い昔話をたくさん知っています。

集った貴族の中に一人だけ気にいらない人物がいます。イリス・ベインという女性です。（彼女は、なんとみんなから「イリス・ベイン閣下」などと呼ばれているのです！）当然私が彼女の事を、みんなとおなじように呼ぶはずがありません。彼女はメイフェアの社交界でデビューし、誰とでもすぐにうちとけるので、ちょっと親しくなった一人でした。でも、彼女は少し非常識なところがあって、私という婚約者のいるジャックと、どうも密かに恋愛関係にあるようなのです。　まあ、とかくお城という場所は、ロマンティックな出来事が生まれやすいところなのです・・・・

ジャックの親友で、イアン・フォーディスという男性がいます。コールドストリーム衛兵隊の将校で、なかなかのプレイボーイ。イリスから聞いた話によると、イアンは、当時ジャックの恋人だったダイルドレ・ハラムという女性と激しい恋におちてしまったそうです。ダイルドレは、イアンとの関係をやめようとしませんでした。親友のイアンとも関係をもつようになったダイルドレに、ジャックは苦しみ、とうとう我慢できずに、彼女と別れてしまいました。

こんな出来事があったにもかかわらず、ジャックとイアンとの友情にひびが入る事はなかったようです。そんな折、ダイルドレの身に恐ろしい事故が起きました。彼女はジャックとの恋の破局に動転し、このお城の井戸に落ちて亡くなってしまったのです。遺体は、とうとう発見されなかったそうです。井戸の水はとても塩辛いので、たぶん地下は海につながっていて、彼女の遺体は海に押し流されてしまったに違いありません。ダイルドレの死は、お城に住む召し使いたちの想像をかき立てました。その井戸の場所は、「白い貴夫人」と呼ばれている昔からの亡霊が、よく出没する場所だそうです。召使いたちの中には、最近居住用に改築した部屋で、その亡霊の姿を見たと言う人がいます。(亡霊というものは、思い出のある古い場所に執着するといいますから、「白い貴夫人」も馴染みの深い場所を選んだのでしょう。)ところが、今回その改築した部屋に現れた亡霊は、まさしく亡くなったダイルドレだと言うのです。なんと恐ろしい事でしょう。 ダイルドレの一家は、コーンウォール地方のたたりに呪われて、落ちぶれてしまいました。彼女の祖父であるポルダーク氏もまた、最近異常な死に方をしています。彼は病気にかかり、ロンドンのある博士のもとに出向いていたそうです。その博士というのは、植物からの成分を取り出すという奇妙な薬を研究している人です。でも、ご推察のとおり、その薬の効き目はまったく見られませんでした。当然ですよね。

その博士は、ウェンディッシュといって、ライオネル卿の親しい友人で、今でもときどき、このお城に訪れます。そのたびに私はぞっとするのです。でも彼がここに滞在したいと望むのならば、断わるわけにはいきません。誰もが、このお城を愛しているのですから。

近々、旅行者用のパンフレットのコピーを送ります。(このお城は、週末になると一般公開するのです。)そのパンフレットを読んだら全てのことが分るでしょう。パンフレットには、例の「白い貴婦人」の亡霊のことも書かれているのですよ。きっと旅行者の好奇心を駆り立て、訪れる人が増えることでしょうね。

2階の見取図に書斎があります。私が、ジャックの仕事を手伝って、書類の整理をする場所です。ここには、ライオネル卿のコレクションである、書物や手書きの原本が置いてあります。

ライオネル卿もジャックと同じように、所有地や財産の管理をしていましたが、家で過ごすということはありませんでした。彼は旅行好きで、世界中を回り、家族の財産を使い果たしてしまったのです。最後の旅行の地は、南アメリカのアマゾン川流域でした。彼は、そこで致命的なジャングルの病気にかかってしまい、それから亡くなるまで、ずっとこのお城のベッドに寝たきりでした。彼の負債や薬代を払うために、お城の一般公開に踏切ったのです。ライオネル卿の死後、ジャックがすべてを相続しましたが、今でもなお、実際に相続した財産と、ライオネル卿の財産とが合いません。ライオネル卿は、高価な財宝をこのお城のどこかに隠したに違いありません。もしも、私たちが、その財宝を見つけ出せなかったときには、ライオネル卿の負債を返済するために、相続した家財や家宝のすべてを売り払わなければならないのです。

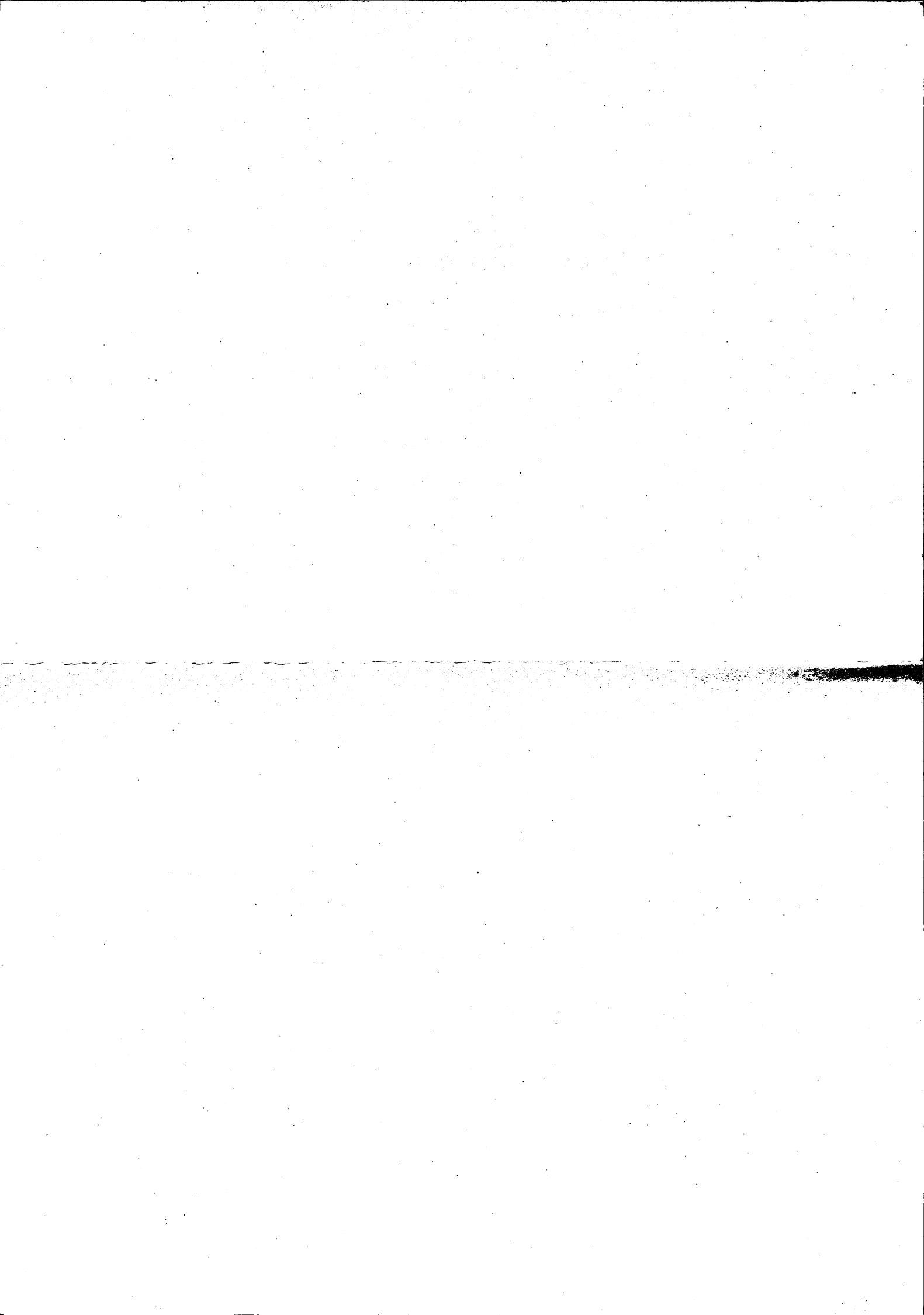
古美術商のモンタギュー・ハイドは、いつも、なにか良い品物が入らないかとロンドンから来ては、あちこちを見て回っています。本来なら私は、彼に対してもっと親切にするべきなのでしょうね。

別に、彼は意地の悪い人間ではないのですから。でも、彼と会うたびに、600年いいえ700年もの間、ずっと先祖代々大切に守り続けてきた、美しい家宝を、手放さなければならないのかと思うと、どうしても好意的な態度はとれません。やはり、すべての財産は、永遠に私たちの手で守るべきですよね。

コーンウォール地方のこと、このお城のこと、そして高級貴族たちのふるまう奇妙な習慣など、話をすれば尽きないのですが、夕食の前に、ライオネル卿の書類をもう少し調べなければならないので、この位にしておきましょう。この間ジャックにも言ったのですが、彼の妻になっても、これからも書類整理の手伝いは続けるつもりです。だって、彼が他の女性を、私の代りに連れてきたら、不愉快ですもの。

最近「白い貴夫人」の話を聞いてから、どうも恐ろしくて落ち着きません。あなたがきてくだされば、どんなにお気が休まる事でしょう。すぐにでも飛んで来ていただきたいのですが、遠方からの訪問になるので強くはお願いできません。とりあえず、ご返事だけでもすぐにいただけないでしょうか？

でも、もしよろしければ、ぜひおいでください！「亡霊屋敷」に滞在するチャンスなんて、めったにありませんもの。心からお待ちしております。

愛をこめて　タマラより

4月 23日

助けて下さい!!

誰かが、私を殺そうとしています！芝居じみた事と思われるでしょうが、本当なのです。
もう、怖くて怖くて仕方がないのです。

私は、今まで亡霊の存在を信じていませんでした。でも、見たのです。噂の「白い貴夫人」の亡霊を本当に見たのです。恐ろしくて震えがとまらないほどでした。夜中にふと目を覚ますと、そこに、私を見降ろしている女性がいたのです。恐ろしいほど血の気がなく、青白い顔をしていました。そして突然、姿を消したかと思うと、巨大な黒い蜘蛛がベッドの上に落ちてきました！私は、大声をあげて毛布についた蜘蛛を無我夢中で振り払いました。ジャックは、私の叫び声を聞いて、部屋に駆け込んできてくれましたが、そのときには、もう蜘蛛の姿はありませんでした。

最初は、単に怖い夢を見たのだと思っていたのですが、そうではなかったのです。それから2、3日後、こんなできごとがありました。机の引出しを開けたとたん、毒蛇がはっきりと立ち上がり、私に襲いかかってきたのです。もう少しで咬みつかれるところでした。ご存知のとおり、毒蛇に咬みつかれたら死んでしまったかもしれません。幸い、すぐに毒蛇に気付いたので大事には至りませんでした。

私は、「白い貴夫人」の亡霊を見たとき程、怖い思いをしたことはありません。最近その亡霊を見たという人に言わせると、それはまさしく、ダイルドレ・ハウムだと言うのです。ダイルドレ・ハウムとはジャックの昔の恋人でこのお城の井戸に落ちて溺れ死んだ女性です。彼女は、私を苦しめるためにこの世にさまよい込んできたのでしょうか？

一体私はどうしたらよいのでしょう？あなたのところから、ここまでかなり遠いので、お願いするには申し訳ないのですが、こんなことを頼めるのはあなたをおいて他にいないのです。お願いです。助けに来てください。あなたは、これまで多くの謎を解いてこられたのですから、今回の事件も、きっとまた解決してくださると信じております！

愛をこめて タマラ より